

どこまで、読むか 駒田晶子

- ・お父さん、とこゑして階下に下りゆけば夕焼けきれいときみは眩く
- ・わが妻のどこにもあらぬこれの世をただよふごとく自転車漕ぐ
- ・夕つ日は疎林の中にきりこみてその中に在るひとりてらす
- ・鏡台に立てるこまごましき壘類のひとつひとつがわれを見てみる
- ・なくなりて三月過ぎたるうつしよに「生きて負ふ苦」の雪ゆれりけり
- ・とねりこの強靱なる根を掘り上げてひととき死にし妻を忘れつ
- ・ああ和子悪かつたなあとこゑに出て部屋我真ん中にわが立ち尽くす
- ・カーテンは野分の風をはらみたりその中にふとだれか隠れて
- ・思川の岸辺を歩く夕べあり幸うすかりしきみをおもひて
- ・よべみたる悲しき夢のつづきにても木香薔薇のさざなみわたる
- ・隠元の筋むくときもありありときみなきことは思はれて来ぬ
- ・たどたどしくお盆飾りをつくりをり胡瓜の馬やなすびの牛や
- ・フリージアの花を買いきて壇にさすひとりくらせるみづからのため
- ・妻の墓よりかへり来たりてひといきに冷えたる桃を啜り食ふな

り

・秋天にやまばとのこゑひびくときおもかげたちて恋しかりけり
 小池光『思川の岸辺』を読んだ。とてもよかった。何が、よかったのか。とことん挽歌であったからだろう、と考える。二〇一〇年十月に妻を亡くした、とあとがきにある。一冊には、残された者の喪失感と、ひとり生きる姿が浮かび上がる。病み伏せる妻の姿は詠まれていない。声がした、笑いあつた、けれども・不在の存在感が深まってゆくのだ。読者は、簡単でさびしい一首から作者の心もちを実感できる。わたしの母が亡くなったとき、「心の花」の大先輩・小紋潤さんに「つらいだろうけど、たくさん、たくさん挽歌をつくれ」と言われた。わたしの力不足で多くは詠めなかつたけれども、あれから十二年、やはり詠んでよかつた、と思う。『思川の岸辺』の五百二十四首中、東日本大震災を歌っている作品は四首。妻が亡くなってから五カ月目に起きた震災（と読みとつてよいのだろう言葉の幹旋）、少年時代に泳いだ荒浜の海、テレビに映される少女、停電の夜のわれ、のみであった。直球の挽歌集だ。真つすぐしか投げられないものなのかもしれない。

佐佐木幸綱ブログ「ほろ酔い日記」二〇一五年十二月二十九日から抜粋を。「最近、短歌の読みは「迎えすぎ」の傾向が強くなつてきている、そう感じます。先回りして、作者の意図をくんで作品を読む。言い換えれば、作品を読むのではなく作者を読む、それが当たり前になつてきている気がします（中略）読者と作者がオトモダチの関係、そんな「読み」が一般化しはじめると、必然的に、歌壇は一般読者を遠ざけることになるでしょう。」最近のわたしの読みを指摘されたようで、胸に刺さつた。